

商務印書館『涵芬樓新書分類總目』について

沢 本 郁 馬

商務印書館に編訳所が設立されたのは、創業からかぞえて5年後の1902年だった。

商務印書館は、名前の「印書館」が表示すとおり印刷を主要な業務として創立された。印刷業を営みながら業務を拡大するためのひとつの足がかりにしたのが、教科書の編集発行だ。社主の夏瑞芳は、印刷と出版は異なることを知っていた。注文を受けて必要な印刷物を作る。注文主がはっきりしているかぎり収入を予定することができる。だが、自分で書物を発行するとなれば、それとは異なる。出版を行うには危険性がつきものである。彼はそれを知る経験があった。社会に受け入れられる出版物を刊行するためには、編集段階で内容を吟味しなければならない。そのためには独立した専門組織が必要だ。まわりからの助言を得て、夏は編訳所の重要性を理解していた。日本金港堂との合弁交渉が、表立たないよう静かに進行していた時期にあたる。1903年11月、商務印書館と金港堂の合弁が正式に発足した。東京の金港堂から雨山長尾楨太郎らが上海に派遣される。日本人の彼らが所属したのが、この編訳所だ。長尾楨太郎たちは、ただちに商務印書館の担当者たちと共同して小学生用国文教科書を編集しはじめた。同じ日本人でも印刷担当の木本勝太郎は、商務印書館印刷所に配属されたのだろう。

1904年、編訳所に資料兼図書室が設置された。

編訳所の図書室は、参考書籍を集めている。編集に役立てるのが目的だ。所長の張元済がその方針を実行していたのは周知のことだろう。最初は内部閲覧に限っており、一般には公開しない。蔵書楼、つまり図書館を「涵芬樓」^{*1}と称するのは1910年のことだ。

蔵書が増加するにしたがい、それを整理分類する必要にせまられる。保管管理を強化するために蔵書目録を編集することにした。整理の責任者は孫毓修であった*2。

阿英が言及した『涵芬樓藏書目録』

阿英が『晚清小説史』(1937)の冒頭で紹介している。清末小説を収録したいくつかの目録をあげたそのなかに『涵芬樓新書分類目録』^{※2}がある(別の箇所では『涵芬樓新書分類総目』と書く。以下『新書総目』と略す)。『新書総目』に掲載された書物のうち刊行が時期的にもっとも遅いのは、1911年だという。わざわざそう説明のを見ると、刊年を印刷した奥付はないことがわかる。書名からして明らかに商務印書館編訳所の蔵書目録だ。阿英は次のように説明する。その「文学類」には、翻訳は400種近く、創作は約120種を収録する、と。

阿英は、清末小説に関連して蔵書の多い例として『新書総目』をあげたのだった。彼自身が『晚清小説史』改訂版(1955)でいうのには、少なくとも1,000種以上、涵芬樓所蔵の約3倍^{※3}を知っている、と。阿英がここで知っていると書くのは、単行本を実物で所蔵しているという意味にちがいない。集書の時間差があるから両者を単純に比較することはむつかしい。そこをあえていえば、小説について当時の涵芬樓よりも阿英個人の蔵書のほうがはるかに多かった。阿英が早くから清末小説に注目していた証拠のひとつだといつていい。また、涵芬樓蔵書がのちのち話題にのぼるのは、阿英のこの言及があるからだ。

『新書総目』は、相当数の創作、翻訳作品を記録しているらしい。私は、該目録を見たいと思った。ところが、その機会を得ることができない。『涵芬樓藏書目録』のことを頭のスミに置く。『新書総目』と限定しないのは、『涵芬樓藏書目録』に『新書総目』が含まれているという予想による。

それにしても奇妙なことだ。阿英が言及したのち、該目録について説明した研究者はいない。いろいろ推測する文章はある。だが、目録そのものを手にとって説明する文章は、長い間でてこなかった。

実際に刊行された書籍の目録だ。たとえ蔵書そのものを見ることはできないにしろ、目録だけでも研究にとって有用であるに違いない。だが、手にした人は少ないらしい。私は商務印書館の関係者に、該目録を所蔵しているかどうか質問したことがある。昔のことだ。その人も見たことはないという返答だった*4。

商務印書館編訳所にとっての蔵書目録は、内部資料、あるいは内部発行というこ

とになろうか。当初の形態が内部向であるならば、目録は外部に出てこない。それが普通だろう。ところが阿英は見ている。彼の資料検索網は、かなり深いところまでひろがっていたわけだ。

『涵芬樓旧書分類総目』

ものはためし。『新書総目』と指名して中国書籍専門店に注文したことがある。試したかいがあった。私のもとに届いたのは複写だった。原本と複写は違う。だが、内容を見ることができるならば、複写であろうとかまわない。手にとれば、『旧書総目』だった。奥付はない。刊行は1912年か⁵。

本文上部欄外には、「涵芬樓藏書目録」と印刷されている。これが藏書全体の名称だと理解した。書店が送ってきた複写は、間違いではない。ただ、阿英が手元において説明した目録ではないことも事実だ。つまり、私が見たいと思う目録『新書総目』ではなかった。

涵芬樓藏書のなかの「旧書」部分を選び出して「旧書分類総目」というのか。ならば、それと対になった「新書」の総目録なのだろうか。関連する複数の文章を読むと、いくつかの呼び方があるらしい。『旧書総目』を見ているだけでは、そのほかと簡単には区別ができない。

参考までに示す。『旧書総目』の構成は、次のとおり。借閱図書規則、旧書編目録言、目次（部／類／属の3級に分ける）、目録本文、続編である。

複写には、扉、奥付ともに存在していない。表紙はついているにしても文字の類は印刷されていないらしい。ゆえに複写されていない。

冒頭に掲げられた「借閱図書規則」を見る。涵芬樓の藏書全体について説明している。関係する部分について説明しよう。

番号のかわりに千字文（元は玄の避諱）を使い、藏書を以下の8門に分けています。

天字 旧書

地字 教科書及教科参考書

元字 東文書

黄字 英文書

宇字 日報雑誌章程

宙字 地図掛図雑画

洪字 照片明信片

荒字 碑帖

この分類は、今に見る一般図書館の分類方法とは違う。また、のちの商務印書館が自社刊行物を分類するさいに採用した規則とも異なる⁶。当時の商務印書館編訳所が独自に考案した分類だ。書籍を編集するにあたって参考になる書籍を、効率よく引き出すことを優先させた。その結果がこのような分類になったらしい。いかにも出版社の資料室兼図書館のように思える。

「天字 旧書」に所属する書籍を集めて上記のとおり『旧書総目』と呼んでいる。目次ページの頭に目を引く箇所がある。「涵芬樓旧書分類総目」と明記してあるのだ。これが『旧書総目』の書名だと考えていいだろう。

目録本文は、書名、冊、字、号の各欄にわけて2段組で記録される。

「書名」「冊」は、そのままを記入する。

「字」欄には「天」1字が入る。すべてが「天字」に属する書籍だから、記入は必要でないように思う人もいるだろう。しかし、図書管理者からいえば、8門のどれかが明記されていなければ本の搜しようがない。必須なのだ。

「号」は、受け入れ順につけた書籍の個別数字だと最初は推測した。だが、よく見ればそうでもない。複数の書籍が同じ数字を共有する。さらに、巻末の「続編」を見る。あとから増補したのであれば「号」は、すべてが4桁かといえば、3桁のものも混じっている。およその配置場所を示しているのかもしれない。

収蔵庫内部を大きく8門にわけ、書籍は番号順に配置されていたことが想像される。そうだからこそ閲覧請求があったとき、目的の書物をすぐさま取り出すことができる。

分類表をもういちど見る。2番目の「地字 教科書及教科参考書」は、涵芬樓蔵書の特徴を示して象徴的だ。金港堂と合併した以降の商務印書館では、主力刊行物が教科書だった。そのことの反映にほかならない。教科書を編集するにあたって必要になる材料を収蔵している。他社の教科書を手元において比較することもあっただろう。

3番目の「元字 東文書」とは、日本語書籍を意味する。ひとつの門を構成するほど大量に所蔵していたらしい。参考価値が高いという認識があったと考えられる。

いくつかの疑問がでてくる。

「地字」以下の各門ごとに目録が別に編集されたのだろうか。たとえば、地字ならば『涵芬樓教科書及教科参考書分類総目』とか、元字では『涵芬樓東文書分類総目』などなど。そのような目録があるとは、聞いたことがないのだが*7。

また、小説という分類が涵芬樓の蔵書には設定されていないことに気づく。参考図書としての小説は、編訳所にとって必要がないという考えだろうか。だが、阿英の説明を読むかぎり、そのようなことはあり得ない。彼のいう「文学類」には、創作と翻訳の両方が収録されている。あるいは、上の分類のひとつに吸収されているのか。可能性があるとすれば、「地字 教科書及教科参考書」あたりになるか。いや、当時の小説が「教科参考書」になるだろうか、という疑問もないではない。資料が少ないからいろいろと考えてしまう。

上述のとおり、阿英は「文学類」と書いている。小説史のなかでとりあげる創作と翻訳だから、小説類を含んでいることに間違いはないだろう。しかし、くり返しになるが、蔵書の8門には、独立した「文学」も「小説」もその名称がない。彼がその目録から抽出して文学類といったのだろうか。あやふやな推測ともいえない想像しかできない。

「旧書」目録については私の手元に複写があるからわかる。だが、「新書」目録との関係はどうなるのか。漠然と、旧書に対する新書と2分して考えていた。どうも違うらしい。阿英の説明とも、どこか食い違っている。

書名を見るだけでは問題は解決しそうもない。さがし続けて数年が経過した。

いわゆる『涵芬樓地字号目録』

汪家熔輯集「五清末西学出版社概覽」(以下、「概覽」と略す)が、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』補巻下冊(武漢・湖北教育出版社2011.2。182-411頁)に掲載されている。

これは、いくつかの図書目録にもとづき、汪家熔がそれらを再編集して作成したものだ。題名は「出版社概覽」となっている。いかにも当時の出版社について解説したものに見える。だが、そうではない。その内容は出版社別に整理しなおした図書目録である。出版社の名称を現代中国語音abc順に配列した。それぞれの出版社が清末時期にどのような刊行物を世に送り出したのか、それが一覧できるようになっている。図書内容による分類はしていない。刊行されたあらゆる書籍が含まれる。簡単にいってしまえば、清末時期出版社別書籍一覧だ。汪が整理した結果、550以

上の出版社が、約4,000種の書籍を出版していたことが判明する（該書185頁）。

「概覧」本文の記述についておおよそを紹介しておく。

まず、さきほどのべたとおり既存の目録から出版社を抽出し、現代中国語音順にならべる。汪家熔の工夫は、まさにこの部分にある。出版社には通し番号をふった。刊行した書籍名、著訳者、発行年を記録する。各書の末尾に典拠として数字などをつける。汪家熔がそのほかに参照したもの、たとえば叢書であれば、典拠欄に「叢書」と記入する。

再編集の際に使用したという目録は、以下のとおり（便宜のために数字をふる）。

- 1 『涵芬樓地字号目録』（以下、『地字号目録』と略す）
- 2 上海図書館編『近代現代叢書目録』
- 3 当時の書籍に掲載された広告 4 本

1 『地字号目録』が再編の主体である。主体であるから圧倒的な数を占める。問題が多いから後で述べたい。

2 の叢書目録について、汪家熔は書名を示すのみ。私が出版社と刊年を次のように補う。香港・商務印書館1980.2。

3 の広告は、4 本だけにはとどまらない。「概覧」本文を見ると典拠（『地字号目録』のページ数など）を空欄にしている作品がある。これが広告を示すと思われる。それらの明細は、次のとおり（出版社の前にある数字は、出版社別の通し番号。カッコ内の数字は「概覧」のもの）。

82改良小説社（209-210頁）、189鏡今書局（245頁）*8、208鏡今書局（249頁）、384時報館（339頁）、448小説進歩社（365頁）など。

ほかに、汪家熔は説明していないが、上の3件とは別物がある。典拠欄に「実物」と示すものを収録する。413通雅書局の4種である（346頁）。文字通り、汪家熔の手元にある実物で補ったらしい。

以上の2と3は、それほどの量があるわけではない。再編集にあたって主として使用したのが、1の『地字号目録』だ。その概要について、汪家熔の説明を読みながら紹介する。

該書の出版年は宣統三年（1911）、全435頁の分類目録であるという。ページ数（いわゆるノンブル）は、通してふられている。商務印書館図書館が独自に考案し

た3級の分類表〔三級分類表〕を採用する。すなわち、第1級は、哲学、教育、文学、史地〔歴史地理〕、政法、理科、数学、実業、医学、兵事、美術、家政、叢書、雑書の14類だ⁹。見てわかるように、出版物の全体をおおっている。

収録された書籍の出版年は、光緒二十五年(1899)¹⁰から宣統元年(1909)¹¹まで、3,689種を収録する(183頁)。汪家熔は、刊行物は全体で「約4,000種」だと書いている。そうなると、『地字号目録』は、全体の約92%を占める。再編集の主体であるというふざわしい。

いくつかの疑問

私がなぜ「問題の」とつけるのか。上にみる汪家熔の説明は、大事なことをいくつか脱落させているからだ。「概覧」本文を見ただけで、その不足部分が自然にわかる。「疑問」と書いて数える。

書名にある「涵芬樓」は、いうまでもなく商務印書館の蔵書楼だ。そこまではよい。では、「地字号」とはなにか。今まで見てきた『旧書総目』、あるいは、のちに紹介する『新書総目』とは、どういう関係にある目録なのか。汪家熔は説明しようとはしない。

疑問1：『地字号目録』は、なじみのない書名だ。汪家熔以外にそれを言った人はいない。当然ながら、その『地字号目録』は、はたして本当の名称なのか、と疑問がでてくる。

手がかりは「地字」である。読者はお気づきだろう。前出『旧書総目』に8門があった。「天」とくれば次は「地」だ。「天字」に分類された書籍を集めたのが『旧書総目』だった。ならば「地字」は、「教科書及教科参考書」を指すに違いない。

疑問2：これこそが、私の搜していた『新書総目』そのものではなかろうか。

該目録の「出版年は宣統三年」だ、と私は紹介した。汪自身が、「宣統三年の《涵芬樓地字号目録》をさがしあて〔找到一個宣統三年的《涵芬樓地字号目録》〕」(183頁)と記述しているところからそう読みとった。

しかし、奥付に刊行年が宣統三年だと明記してあるかどうかは、別の問題になる。『涵芬樓蔵書目録』を紹介する今までの文章を読めば、この目録には奥付はつけられていないことがわかっている。理由は簡単だ。内部資料だからそれらを記す必要はなかった。彼は奥付に拠って宣統三年だと書いているわけではないだろう。

疑問3：汪家熔は微妙な説明のしかたをしている。収録書物の発行年から類推して宣統三年の刊行だといっているにすぎない。つまり、奥付の有無について説明を避けているように思われる。

第1級14類の分類は、目録（目次）に掲げてあるものを書き写したのだろう。汪家熔は、それをもとにしているから哲学、教育、文学などの明細を示すことができた。

疑問4：では、「3級の分類表〔三級分類表〕」とは、どういう種類の分類なのか。第1級が14類に分けられているのはわかる。汪は、その細目をあげている。しかし、第2、3級は具体的にいえばどういう内容か。詳細が不明だ。

疑問5：『地字号目録』の構成内容が『旧書総目』と同じであれば、目次の頭に書名をかけているに違いない。それを取りだして『涵芬樓地字号目録』だというのだろうか。旧書総目が『涵芬樓旧書分類総目』と称したのとは、書名をならべると字面の釣り合いがとれない。目次を見たはずだが、なぜわざわざ『涵芬樓地字号目録』と称するのか。その理由がわからない。そこに再びたちもどる。

さきほど「ノンブルは、通しでふられている」と私は書いた。ページの通し番号といつても同じことだ。「概覧」では、各作品のうしろに典拠として明示してある。ついでにいえば、出版社別刊行物の並べ方は、このページ順になっている。

ページが通し番号であるのは当たり前だと思われるかもしれない。ところが、『旧書総目』は経史子集と叢書の各部に分類し、それぞれ別に新しくノンブルをたてている。通し番号ではない。

疑問6：それにくらべると、『地字号目録』が採用したのは違うやり方になる。本当にそうなのか。

汪家熔輯集「概覧」は、前述したように『地字号目録』を再加工するのが編集の基本方針だ。また、「基本の原則は単行本にもとづいている〔基本原則是根拠書〕」（186頁）。目録によって目録を作るのだから原本の誤りを引き継ぐのもしかたがない。これも汪家熔の説明だ。縦のものを横にしただけ、といいたいらしい。

書き写すだけだから、簡単な作業だと思うかもしれない。しかし、それは違う。写し間違い、書き間違い、読み間違い、勘違い、さらには見落としなどから免れるのはむつかしい。自分の経験からいっている。小説類にしぶっても、本稿附録の正誤表くらいの量になる。原物の書籍を見ていないから、というのはいいわけにならないだろう。

読み間違いとは次のような例だ（以下は、主として小説類を検討する）。

445香港中国日報社[館]にまとめられた作品がある。最初の頁と行は、「概覽」を収録する『中国出版史料・近代部分』補巻下冊のもの。

364頁-1行から365頁7行まで

幾道山恩仇記上編 法国亞歷山大仲馬著 抱器室主人訳 光緒三十三年 125

幾道山恩仇記上編上編卷一 法国亞歷山大仲馬著 抱器室主人訳 光緒三十三年 125

幾道山恩仇記上編上編卷二 法国亞歷山大仲馬著 抱器室主人訳 光緒三十三年 125

幾道山恩仇記上編中編卷一 法国亞歷山大仲馬著 抱器室主人訳 光緒三十三年 125

なぜこのように同じ書名らしきものが配列してあるのか。不思議に感じる。共通している箇所をしいていえば、書名が『幾道山恩仇記上編』だということくらいか。上の表示は、『幾道山恩仇記上編』にまた上編と中編があることを意味する。

原文〔涵訳74〕（『新書総目』文学部、小説類、翻訳之属。74頁）は以下のようになっている。2行のみだ。

幾道山恩仇記上編 / 法国亞歷山大仲馬著 抱器室主人訳 / 香港中国日報館 / 清光緒丁未年 / 一 / 地 / 四五九九

又 上編卷一二 中編卷一 / 又 / 又 / 又
/ 三 / 地 / 四五九九

説明するまでもないだろう。書名は『幾道山恩仇記』だ。上編で1冊を所蔵する。次行の「又」は同じ作品である。その上編が2巻あり、中編で1巻、合計3冊が蔵されている。請求番号は同一だから、同じ場所に置いてある。原文に記された発行年の「光緒丁未年」は、編者のほうで「光緒三十三年」に換算したらしい。

常識の範囲内で読んで、奇妙だと気がつくはずだ。「上編」が作品名の一部だと思いこんだ。間違った理由だろう。

疑問7：私が「単行本」と訳した「書」からして、『地字号目録』は単行本だけを収録していると汪家熔は考えたらしい。それは正しいのか。

書目をよく見れば、単行本では説明のつかない作品がある。

354商務印書館が刊行した書籍の一部は次のように記述する。

例1：316頁-9行 月球殖民地 荒江釣叟 137

この1行は、こう読む。

354商務印書館に集められた作品だから、発行元は商務印書館である。書名が『月球殖民地』、著者は荒江釣叟。発行年は空白、つまり記載されていない。最後の数字は、典拠を示す。もとづいた『地字号目録』137頁に記載されているという意味だ。

これを見れば、刊年不明の商務印書館発行『月球殖民地』が、単行本で出版されたことになる。普通は、そう考える。汪家熔は、編集方針は単行本に基づいた、とわざわざ説明したのだ。

樽本照雄編『清末民初小説目録』を検索し照合してみる。

まず、作品名が違う。正しくは「月球殖民地小説」という。初出は、『繡像小説』第21-62期（刊年不記）掲載である。雑誌連載のままで終了した。当時この作品が単行本で刊行されることとはなかった。

この事実を知っていると、上の「概覧」（すなわち『地字号目録』）に見える作品がどういう種類のものかわからなくなる。初出が雑誌であることを示唆しているわけでもない。

449小説林にも同様の例がある。

例2：365頁-3行 電冠 陳鴻璧 133

ここにあげられた『電冠』という翻訳作品は、原著者不記、訳者が陳鴻璧で、小説林が発行元である。そうとしか読みとれない。

まず、発行元を「449小説林」にしているのがすこし気になる。出版社としてならば「小説林社」と表示してほしい。ただし、「小説林」を出版社の意味で使用することもある。原文のままなのだろう。

これも『清末民初小説目録』を見れば、雑誌『小説林』第1-8期（光緒三十三年正月-丁未十二月）に掲載されている。単行本にはなっていない。

ほかにもいくつかの異同が見つかる。

506月月小説社のばあいはこうだ。

例3：384頁8行 宜春苑 月月小説社 134

版元が月月小説社であり、また訳者も月月小説社という意味である。ここもなぜだか刊年不記になっている。

ところが、該作品は、（法）某著、無款羨斎訳で雑誌『新小説』第6号-第2年 第2号（第14号）（光緒二十九年六月十五日-刊年不記 [光緒三十一年二月] (1903.8.7- [1905.3])）に連載された。月月小説社とはもとから関係がない。また、単行本でもない。なぜそのような誤りが生じるのか。理由は不明とせざるをえない。

少しとまどい、疑問を感じるのは、次のような例だ。こちらも月月小説社の刊行である。

例4：384頁-7行 警黄鐘伝奇与盜偵探血之花合集^{マサ} 祈黄樓主人 139

表記がないから刊年不記に分類される。小説にしては長い書名だ。見れば「警黄鐘伝奇」「盜偵探」「血之花」の3作品を「合集」している。共通の作者が祈黄樓主人という意味になる。そうとしか読めない。

これも調べてみれば、それぞれの作品は別々なのだ。

「警黄鐘伝奇」の著者は祈黄樓主人でよい。しかし、該作品は雑誌『新小説』に連載された。「盜偵探」は、解朋著、迪斎訳述で、雑誌『月月小説』に連続掲載だ。「血之花」はというと、蘇格蘭小説家施高脱（スコット）原著、猿述、虫筆と表示し、雑誌『新新小説』に連載だということがわかる。

「合集」というかたちで刊行されたものは存在しない。異なる3作品の著者を祈黄樓主人ひとりに代表させている。掲載雑誌はすべて省略し、発行元も月月小説社で一括りにした。実際にはないはずのものが、ここに掲げられている。しかも、刊年不記であるところは共通する。

もうひとつ、同じような例をあげる。こちらも月月小説社が版元だ。

例5：385頁5行 上海遊驛錄^{ママ}錯海波与美国独立史別裁合冊 吳研人英國哥林斯 146

一見して普通ではない。これほど長い名前の作品は、当時としては珍しい。いや、よく見ればこれも例4と同じように複数の作品を連ねたものだ。「上海遊驛錄」^{ママ}「錯海波」^{ママ}「美国独立史別裁」の3点である。吳研人は、ありふれた誤植にすぎない。

さきに見た汪家熔の説明によれば、単行本が基本になっている。それから見れば、上に示した例はいずれも原則からはずれる。少なくとも、単行本ではない。汪は彼なりの注釈をつけてもよかったのではないか。たとえ元の記述がそうあったとしてもだ。あるいは、そうだからこそか。

上記の実物は、見ることができない。しかし、共通する箇所がある。つまり、いずれも雑誌に掲載された作品である。これにはなにか意味があるはずだ。あとでもういちど触れる。

そういう種類の記述は、たぶん汪家熔が拠ったいわゆる『地字号目録』そのものにあるのだろう。彼が再編集したときに誤記したとは考えにくい。といっても、それを確かめるには、『新書総目』を見る必要がある。これは私の興味からいっている。当時の書目の利用者からいえば、わざわざとりあげる問題ではないかもしれない。

いうまでもなく、商務印書館編訳所の蔵書棟に置かれている書籍目録だ。たとえば、「月球殖民地小説」を読みたいと思う利用者は、図書請求書にそう書くだけで用が足りる。実物を手にすればそれがどういう形態の書籍かがわかる。書目本文に細かい説明をする必要もない。そういう考えも成り立つだろう。それゆえにあくまでも蔵書目録なのだ。

誤字と脱字

汪家熔輯集「概覽」には、その元本（いわゆる『地字号目録』）を見るまでもなく誤字と脱字があることがわかる。元本と対照もせずになぜそうだと言うことができるのか。

あげられた作品のひとつひとつを前出『清末民初小説目録』を使って調べる。す

ると、ありそうもない誤字脱字がでてくる。

参考までに、めだつ誤字の例をいくつかあげる（頁数は「概覧」）。

思綺斎の「斎」を「斎」に誤る（239、397頁）。ただし、正しく表示するものもある（247頁）

曾宗鞏（312頁）、曾広銓（402頁）の「曾」を「会」に誤る。

「現形」を「現行」に誤る（228、261、362頁）。

「馨」を「声」に誤る（210、316頁）。

蒋景緘の「蒋」を「将」に誤る（369頁に2カ所）。

以下は脱字の例だ。

「遯廬」を「廬」にする（262頁に2カ所）。

「吳栄鬯等訳」を「吳栄等訳」にする（352頁）。

「奚若訳」を「若訳」にする（366頁に1カ所、367頁に3カ所、368頁に3カ所）。

「吳櫓訳」を「吳訳」にする（393頁）。

「無歎羨斎主人訳」を「無羨斎主人訳」にする（216頁に3カ所）。

いずれも単純な間違いのようにみえる。普通に考えて、誤る箇所ではなさそうだ。

編集作業の詳細は不明のまま、結果として誤字脱字の事実が残った。そのほかは、うしろの「附 「五清末西学出版社概覧」正誤表」をご覧いただきたい。

『新書総目』

私が入手した『新書総目』は、複写である。

『旧書総目』を参照しながら説明する。

その内容構成は、次のとおり。借閱図書規則、目次（部／類／属の3層に分ける）、目録本文などだ。

表紙¹²、扉、奥付などは、ついていない。これは新旧総目の両者で共通する。

「借閱図書規則」も同文である。『新書総目』は、『旧書総目』と基本的には同じ構成だと理解できる。

違いといえば、旧書にはある「旧書編目芻言」に相当する文章が新書にはない。次が重要だ。目次の冒頭に「涵芬樓新書分類総目」と明記してある。ならば、『旧書総目』と同じことだ。『涵芬樓新書分類総目』が正式名称である。

こちらのページ数は通しではない。各部ごとにページを新たに起こしている。また、「続編」はない。

文學部 小説類 (翻譯之屬) (編著之屬)

涵芬樓新書分類總目

哲學部

總記類	倫理類
哲學類	修身之屬
雜類	格言之屬
教育論	經訓之屬
國民教育	修身之屬
教育之屬	格言之屬
說之屬	經訓之屬
之屬	修身之屬

文学部小説類の翻訳之属から編著之属へ

目次冒頭に「涵芬樓新書分類總目」とある

普通ならば凡例によって示されるはずの編集方針が不明である。だが、目次がヒントになってそれを推測することができる。

書籍の内容によって分類し、「部 / 類 / 属」を使うのは、『旧書総目』と同様だ。以下の14部に分類してある。哲学、教育、文学、歴史地理（汪家熔は、略して史地にした）、政法、理科、数学、実業、医学、兵事、美術、家政、叢書、雑書だ。枝分かれした類から属に降りていけば、だいたいの様子がわかる。

本稿に関係する部分を例として示す。大きく分類した「文学部」のなかの「小説類」で、さらに「翻訳之属」と「編著之属」のふたつに分かれる。

汪家熔がいう第1級とは「部」といいかえても同じ。これが阿英の説明した「文学類」のことだった。正確に書くならば「文学部」だ。第2、3級はそれぞれ「類」と「属」に相当する。

阿英が紹介した『新書総目』の「文学類」は、翻訳は400種近く、創作は約120種（合計約520種）を収録していた。私の見ている総目の「文学部 / 小説類」を数えてみれば、翻訳（属）は444種、創作（属）は195種の合計639種だ。阿英が示した数字の約1.2倍の作品を収録している。収録数の違いから、こちらの『新書総目』は、

のちの再版、あるいは増補版だといつていいだろう。

目録本文は上から順に、書名、著作人名、発行処、出版歳月、冊数、字、号を記入するようになっている。

『旧書総目』に比較して項目が増えている。それだけ記述が細かいことがわかる。

「字」欄には「地」1字が入る。

『旧書総目』で説明した「借閱図書規則」は、『新書総目』にも同じものが収録されている。千字文を使った蔵書分類の8門だ。くりかえせば、「天字」は「旧書」を内容とする。つぎの「地字」は、「教科書及教科参考書」である。字に「地」を集めたということは、そのまま「教科書及教科参考書」の目録である。汪家熔のいう『涵芬樓地字号目録』にほかならない。

奥付はないから、収録図書の刊行年を参考にして推測する。

小説類を見ていると、中華書局の刊行物がある。これが決め手のひとつになる。中華書局本は、汪家熔輯集「概覽」には収録されない。これは当然である。中華書局の創設は、中華民国成立直後の1912年だからだ。汪家熔のいう『地字号目録』はその発行が清朝の1911年だ。また、彼の説明では、増補された「続編」はついていないらしい。1911年に刊行された目録に、民国成立（1912年）後の刊行物が収録されることはない。

また、商務印書館が刊行した小本小説叢書も未収録だ。

見ていくと『薄倖郎』の1914年12月発行がある（[涵訳69]）。それを根拠にすれば、こちらの『新書総目』は、1915年ころに刊行されたらしい。王中忱が見た『涵芬樓藏書目録』の刊年が1914年だというのに近い。近いというよりも、同一本ではなかろうか。

5 例の種明かし

記録された作品のいくつかを見てみよう。

涵芬樓に所蔵される「新書」の1冊1冊がもれなく記載されている。蔵書目録だから、その時目の前にあった印刷物を1点と数える。ゆえに、記述の原則は、1作品1行である。同じ作品が重複するばあいは、「又」字を使う。同一作品で刊年が異なれば、出版歳月箇所に記入して区別する。

なぜ当たり前のことを説明するのか。その理由は、1作品1行の原則は、ややもすると単行本1種が1行に記述されていると誤解されるからだ。

汪家熔「概覧」には収録していないが、もとの『新書総目』には記載される。そういう例のひとつを見る。

編著之属 [涵著85] (『新書総目』文学部、小説類、編著之属。[85]は別立てのページ数を示す)

繡像小説 / 本館 / 本館 / 清光緒癸卯年 / 一二 / 地 / 五八五九

『繡像小説』は雑誌である。著者を「本館」と書いている。実は、李伯元、歐陽鉅源らが編集した。つぎの「本館」は商務印書館が刊行したことを示す。発行が癸卯年(1903)だから総目にはその創刊年を指しているとわかる。冊数が12というのは、全72冊からすれば数が少ない。合訂したものが12冊なのかどうか。合訂していれば合冊とか表記するだろう。1906年末に刊行を停止して該誌は全72冊である。上の冊数箇所に「七二」とあっても不思議ではない。だが、そうはなっていない。

汪家熔は、なぜこの『繡像小説』を彼の「概覧」に採録しなかったのか。うっかり収録し忘れたわけではないだろう。それともいわゆる『涵芬樓地字号目録』には掲載されていないのか。

掲載されていないならしかたがない。あえて想像して、排除したとすれば、雑誌だからではないか。単行本を記載の基本としているならば、雑誌の『繡像小説』は原則からはずれるからだ。だが、涵芬樓には『繡像小説』12冊がまとめて置いてあったのが事実にちがいない。

これが、手がかりになる。前にあげた説明できなかった例1から例5までを解明する

目録1行に収録された作品は、かならずしも単行本ではない。そう思い至れば、あとは簡単だ。つまり、そこにあるのは、掲載雑誌からその作品だけを抜き出したものである。別刷り、抜き刷りという。いま、抽印本と表記する。雑誌に掲載された特定の作品だけを抜き出し合訂したうえで販売する。当時、出版社はそれを普通に行なっていた。読者、利用者が自作することもあっただろう。商務印書館編訳所の所員が作成したとも考えられる。原著訳者、刊年、出版社を記さないこともある。目録編集者が採録するさいに迷うところだ。

例1「316頁-9行 月球殖民地 荒江釣叟 137」は、『繡像小説』が掲載誌であることを記録しない。どう考えても抽印本である。との、例2「365頁-3行

電冠 陳鴻璧 133」にしても、例3「384頁8行 宜春苑 月月小説社 134」も同様。

ひとつの典型として例4の「384頁-7行 警黃鐘伝奇与盜偵探血之花合集 祈黃樓主人 139」をもういちど見てみよう。

『新書総目』では、頭に「警黃鐘伝奇」を置く。その下に割り注風に「与盜偵探血」と「之花合冊」を詰め込んでいる。つまり、くりかえせば、「警黃鐘伝奇」「盜偵探」「血之花」を「合冊」した。著者はそれぞれ異なるし、掲載誌も『新小説』『月月小説』『新新小説』と違う。違っていようが抽印本がひとまとめに合冊してあれば、蔵書目録には1冊として記載せざるをえない。細部は省略したことが理解できよう。例5も同様だ。『新書総目』では、割り注風に2行に押し込めて「上海遊駿録」「醋海波」「美國獨立史別裁合冊」という。すなわち、3作品の抽印本をあわせた1冊である。

かたちのうえでは1種類だ。だから、『新書総目』には収録されている。しかし、その内容が抽印本となれば、目録の記述が実物の内容を反映しないものしかたがない。

抽印本のはずだが、詳細不明の作品も収録している。多くはない。だが、たしかに記載がある。

506月月小説社(384-385頁)になぜだか集まる。以下の4種だ。

- 1 384頁-12行 世界奇談 月月小説社 134
- 2 384頁-11行 国民小説 角勝子等 134
- 3 384頁-10行 電術奇談 月月小説社 134
- 4 385頁 1行 短篇小説 月月小説社 145

1『世界奇談』という書名はみあたらない。角書だと思う。原抱一庵訳、陳景韓訳「食人会」と「巴黎之秘密」が角書に「世界奇談」をつけている。いずれも『新新小説』に載った。著者を月月小説社とするのは不適当だ。

2には著者名角勝子が見える。それを鍵語にして検索する。「(国民小説)刺国敵」が『月月小説』に連載されていることがわかる。つまり、書名としてかかげた「国民小説」は、角書であった。

3の「電術奇談」は日本菊池幽芳の作品だ。呉趼人が一枚加わっているのでよく

知られている。ただし、著者を月月小説社とするのは誤り。また、『月月小説』に掲載されたわけでもない。連載されたのは『新小説』だ。さらに、月月小説社から単行本も出ていない。単行本ならこちらも新小説社が刊行した。つまり、月月小説社とはまったく関係がないのだ。誤記したままが抽印本の表紙に見えるのだろう。

すこし脇道にそれて同類の例を示す。4「短篇小説」と同じ「短篇小説」と題する作品がある。名前は同じだが内容は別物だ。それは別の場所に出現している。「概覧」365頁-2行の「449小説林」だ。こちらには、著者を紫崖等と表示する。紫崖は雑誌『小説林』に3作品を発表している。その抽印本をたばねたものだと推測できる。

さて、4の「短篇小説」にもどる。こちらについては、決め手は月月小説社だけだ。ここでいう月月小説社は、上の例からみて雑誌の『月月小説』だと推測できる。『月月小説』に掲載された作品名「短篇小説」そのものは存在しない。あるとすれば角書が短篇小説のもの。しかし、絞り込んだ25作品のどれであるかは、特定することができない。冊子の表紙に「短篇小説」と書かれているだけだろう。当時の利用者は、詳細が不明だからとまどったに違いない。

7 疑問への解答

さきに疑問を7件だしておいた。『新書総目』を見たうえでの私の考えをのべる。

疑問1：汪家熔が『涵芬樓地字号目錄』とよぶのは妥当か。

いわゆる『地字号目錄』と、私が見ている『新書総目』は、基本的に同じものだ。本文の記述構成は、両者ともに一致している。また、『新書総目』という従来からの呼称もある。それらを無視して特別に『涵芬樓地字号目錄』という必要があるのだろうか。どうしてもそうよびたいのであれば、理由を説明しなければならない。汪は根拠を提出していないのだ。

疑問2：汪のいう『地字号目錄』は、私の搜していた『新書総目』そのものか。

基本的にはそうだ。ただ、違うところもある。分岐点のひとつは、中華書局の刊行物を収録しているか否か。そこが異なる。1912年以降の刊行物を収録しているかいないか、と書いても同じこと。汪家熔が見る目録は、初版本だろう。私の見る『新書総目』は、後の再版、あるいは増補版だと考える。

疑問3：『新書総目』の発行年について、なぜ断言することができないのか。

奥付がないから推測になる。汪家熔があいまいに書いているのもしかたがない。

疑問4：書目内部にある第1から3級までの区別を問題にした。

『新書総目』も『旧書総目』と同じく上から「部／類／属」の3級だ。「文学部」について例を示しておいた。ご理解いただけたと思う。

疑問5：疑問1と重なる。書名の問題だ。

私が見ているものには、目次の冒頭部分に「涵芬樓新書分類総目」と明記されている。汪家熔がよった版本には、目次がついていなかったのだろうか。彼は何もいわない。大きな疑問が残る。

疑問6：通しページ数か、別立てノンブルか。

『新書総目』は通し番号ではない。『旧書総目』も同じく別立てだ。同系統の総目でありながらページ数の表示法に2種類があるのだろうか。私は首をひねる。ただし、汪が拵った実物を見ていないから断定はできない。

疑問7：『新書総目』に掲載される作品は単行本だけなのか。

そんなことはない。涵芬樓では、冊子になっているならば単行本と同じあつかいをしていた。たとえ抽印本であろうともだ。

さて、『新書総目』によって阿英「晚清小説目」の誤りを正すことができた1例をご紹介しよう。次のように記述された作品がある。

[阿英76]血性男子 聽雨窗主人編。内容為日本前田正名伝。光緒壬寅（一九〇二）時務報印本。

阿英が採用していた当時の書き方によれば、波線は雑誌を指す。だが、『時務報』に該作品は掲載されてはいない。疑問のままになっていた。

それが、『新書総目』には次のようにある。

[涵訳77]血性男子 日本前田正名著、聽雨窗主人訳、時務書局、清光緒壬寅年

作品名および発行年は同じ。時務書局という出版社が単行本を刊行したとわかる。「時務報」と「時務書局」では、名称の細部が異なる。阿英は、なぜだか出版社を雑誌名だと勘違いしたらしい。

長年にわたって捜していた『新書総目』だ。それが今になって、初版と増補版がほとんど同時に出現したことになる。



附 「五清末西学出版社概覽」正誤表

主として小説類に限る。原著者不記、共訳者不記、刊年の違い、繁体字と簡体字の違いは基本的に数えない。民国以後に出版した書籍は、未収録であっても掲げない。

[涵哲] 『新書総目』哲学部

[涵訳] 『新書総目』文学部、小説類、翻訳之属

[涵著] 『新書総目』文学部、小説類、編著之属

[涵歴] 『新書総目』歴史地理部

：元本の『新書総目』が誤ったため「概覽」も誤る。

：もとづいた『新書総目』は誤っているが、「概覽」は正しい。

頁	行	誤	正
201	4	一名二載繁華夢	一名廿載繁華夢
201	未収録		倭刀恨 [涵訳78]
202	-6	蘇子等訳	蘇子穀等訳
209	-2	美国毛茂迪克著	美国毛茂笛克著
		逸群訳	軼群訳
209	-1	洛逸	治(冶)逸
210	14	声谷	馨谷
211	10	劉樂訳著	劉樂義著
211	11	劉樂訳著	劉樂義著
211	-4	李提摩太著	[涵哲27]同左。李提摩太訳
212	13	威廉振興荷蘭紀略	威廉振興荷蘭記略
212	-7	印度広学会著	俄国克雷洛夫著
215	-4	知心室主人訳	知新室主人訳
215	-2	斯蒂芬偵探案	司蒂芬偵探案
215	-1	毀拿破侖遺像案	竊毀拿破侖遺像案
216	5	無羨齋主人訳	無歎羨齋主人訳
216	7	英國八達克礼著	英國巴達克礼著
216	7	息影廬生訳	[涵訳77]同左。息影廬主訳
216	8	英國甘靡倫夫人著	英國甘靡倫夫人著
216	8	无悶居士訳	无悶居士訳
216	11	日本江山見忠功著	日本江見忠功著
216	13	無羨齋主人訳	無歎羨齋主人訳
216	14	無羨齋主人訳	無歎羨齋主人訳
216	15	第一百十三案	一百十三案
216	16	笏山記	笏山記
228	-5	革命鬼現行記	革命鬼現形記
237	-4	攢生生訳	暫生生訳
238	-5	向隅倦	向隅仙
238	-4	棲露女侠小伝	[涵訳82]同左。棲霞女侠

238	- 1	元和雲氏	元和痴雲氏
239	1	思綺斎藕隱	思綺斎藕隱
243	7	江西各書房	『江西』
243	8	于江鞭獅子等訳	[涵訳71]同左。笑我生訳
243	11	日本広末鉄腸著	[涵訳77]同左。日本末広鉄腸著
245	- 2	189鏡今書局	208鏡今書局 重複させる / 読み間違い
245	- 1	欧美風雲錄	美風欧雲錄
245	- 1	鍾撲岑訳	鍾樸岑訳
246	4	英國培倫著	[涵訳76]同左。美國培倫著
246	4	進化社訳	[涵訳76]同左。中國教育普及社訳
249	8	日本江保著	日本渋江保著
249	10	歐風美雲錄	美風欧雲錄
249	10	鍾撲岑訳	鍾樸岑訳
250	- 6	日本山上上泉著	[涵歴28]同左。日本山上ゝ泉著
251	2	俄国普希原著	[涵訳81]俄国普希巒原著。普希金
251	2	訳者不記	戢翼羣重訳
256	5	文明結婚	[涵訳69]同左。新訳文明結婚
256	6	冰山雪梅	冰山雪海
256	7	神友蓮著	沈友蓮著
258	- 2	科学儀器館 (正)	科学彝器館 [涵訳77]の誤り
261	- 11	繡像	繡像
261	- 11	警羅仙著	警夢癡仙著
261	- 10	松齡田鐘著	松陵田鑄著
261	- 9	学生現行記	学生現形記
262	- 5	廬著	遜廬著
262	- 4	廬	遜廬
266	- 8	243美生書館	[涵訳77]同左。243美華書館
266	- 7	陳春生等訳	[涵訳77]同左。陳春生演話
286	- 5	付闔甫訳	傅闔甫訳
287	7	蟄圓氏	蟄園氏
290	7	日本村井弦斎著	日本村井弦斎著
308	未収録		『繡像小説』 [涵著85]
308	10	林紓等著	林紓等訳
308	12	一愁三怨	一仇三怨
308	13	英國布斯	英國布斯俾
309	- 7	魯賓遜漂流記	魯濱孫飄流記
309	- 6	魯賓遜漂流記続記	魯濱孫飄流記続記
310	- 6	路康華等訳	陸康華等訳
311	10	双孝子吸血酬恩記	双孝子嘆血酬恩記
311	14	二佣案	二俑案

311	-4	英國格理尼著	[涵訳56]同左。英國格理民著
311	-3	英國布斯著	英國布斯俾著
312	5	羅倦小伝	羅仙小伝
312	8	幻翼想	幻想翼
312	14	林紓等訳	陳家麟訳
312	-11	模範村町	[涵訳58]同左。模範町村
312	-9	英國布斯著	英國布斯俾著
312	-8	英國付闡錫著	英國傅闡錫著
312	-7	長樂会宗等重訳	長樂曾宗鞏
313	16	匈牙利利育珂摩耳著	匈牙利育珂摩耳著
314	1	納里雅偵探談	[涵訳61]同左。納里雅偵探譚
314	5	商務印書館発行	[涵訳62]同左。中外日報館発行
314	6	法官秘史	法宮秘史
314	9	日本辛徳秋水著	日本幸徳秋水著
314	13	経過美談	経国美談
314	14	英國式勒徳著	[涵訳62]同左。英國式勤徳著
314	-6	俄王義文第四專制史不測之威	[涵訳63]同左。不測之威
314	-6	英國	俄国
314	-1	玉樓花劫	玉樓花劫正統編
315	1	玉樓花劫統編	上と同じ
315	2	未収録	《賊史》[涵訳64]
315	5	絶島漂流	絶島飄流
315	8	紅蘩露伝	[涵訳64]同左。紅蘩露伝
315	13	美國	[涵訳65]同左。英國
315	15	美國	[涵訳65]同左。英國
315	-8	新訳希臘興亡記	新訳を取る
315	-8	長樂高魯訳	長樂曾宗鞏訳
315	-6	薛一鍔等訳	[涵訳66]同左。薛一諤訳
315	-2	慘世界	慘女界
316	3	夜光璧(正)	夜光壁[涵著89]の誤り
316	13	狭義佳人初集	侠義佳人
316	-11	声兒就学記	馨兒就学記
316	-9	月球殖民地	[涵著91]同左。月球殖民地小説
316	-6	負曝閑談	負曝閑談[涵著91]負曝閑譚とする
319	8	少年叢書哥倫布畢斯麥納爾遜華盛頓	光緒三十四年 哥倫布 / 畢斯麥 / 訥爾遜 / 華盛頓 / 大彼得 / 加里波的 (注: 一括。「少年叢書」は叢書名。作品を「/」で区切る)
319	13	少年叢書哥倫布畢斯麥納爾遜華盛頓大彼得加里波的	宣統二年

哥倫布 / 畢斯麥 / 訥爾遜 / 華盛頓 / 大彼得 / 加里波的（注：一括。「少年叢書」は叢書名。作品を「/」で区切る）

319	-13	商務印書館	鴻寶齋
339	-7	吳研人	吳趼人
342	-4	湯女士紹訳	湯女士紹訳
348	2	万国美術研究社訳	[涵訳82]同左。李石曾訳
348	3	万国美術研究社訳	[涵訳82]同左。李石曾訳
352	-13	唯一偵探談	唯一偵探譚
352	-13	英國愛考難陶著	英國愛考難陶列著
352	-13	吳栄等訳	吳栄鬯等訳
353	-12	日本佐藤蔵太郎著	[涵訳80]同左。日本佐藤蔵太郎著
352	-9	陶立重訳	陶懋立重訳
352	-5	英國史德原著	英史穀德原著
352	-4	法國阿孟查登著	[涵訳82]同左。法國阿猛查登著
352	-2	法國阿孟查登著	[涵訳82]同左。法國阿猛查登著
353	1	珊瑚余談（正）	珊瑚余談[涵著95]の誤り
362	-4	家庭現行記	家庭現形記
362	-4	仙源蒼圓	仙源蒼園
364	11	442香港荷李活道寶雲樓	[涵訳74]同左。香港小説編訳社
364	12	五命離奇案	[涵訳74]同左。英國最近五命離奇案
364	-2	445香港中國日報社	445香港中國日報館
366	9	元和若等訳	奚若訳意
366	-7	英國托馬斯加泰著	英國脫馬斯加泰著
366	-7	陶旦訳	陶叫旦訳
366	-5	遂中灯	隧中灯
366	-5	張伯森訳	張柏森訳
366	-1	英國白拵著	英國白髭拵著
366	-1	鳥衣使者訳	鳥衣使者訳
367	1	元和若等訳	元和奚若訳
367	6	謝慎冰等訳	謝慎冰訳
367	7	福爾摩斯再生後案	[涵訳73]同左。福爾摩斯再生後探案
367	7	元和若等訳	元和奚若訳
367	8	吳江仁墨緣等著	吳江任墨緣等著（訳が正しい）
367	9	英國蕭而斯勃内著	英國蕭爾斯勃内著
367	-12	法國嘉祿付蘭儀著	法國嘉祿傅蘭儀著
367	-9	美國史德蘭	美國史德蘭
367	-7	彼德警長	[涵訳76]同左。彼得警長
367	-6	元和若訳	元和奚若訳

367	-3	東海覚我生訳	[涵訳77]同左。東海覚我訳
367	-2	法国迦而威客	法国迦爾威克（迦爾威尼が正しい）
368	2	身毒販乱記	身毒叛乱記
368	2	溪子	磻溪子
368	3	英國哈葛得著	英國哈葛德著
368	3	元和若	元和奚若
368	6	君殺訳	君穀訳
368	7	東海絶我訳	東海覚我訳
368	8	法国迦而威尼著	法国迦爾威尼著
368	9	無錫章仲等訳	無錫章仲謐等訳
368	-12	英國瑪麗孫著	英國瑪利孫著
368	-12	元和若訳	元和奚若訳
368	-10	元和若訳	元和奚若訳
368	-8	李秋涵	李涵秋
369	5	將景緘	蔣景緘
369	6	鳳春	鳳巵春
369	6	將景緘	蔣景緘
369	-9	而梅	爾梅
未収録のため頁表記なし		[涵著92]双花記	
370	3	警羅仙著	警羅癡仙著
370	7	新撰拒約奇談	[涵著98]同左。拒約奇談
370	7	涼雪人	涼血人
371	8	林翼訳	林翼清訳
371	9	守白訳	[涵訳71]同左。守白
371	10	白侶鴻訳（正）	白鴻侶訳[涵訳71]の誤り
371	-12	日本大津天仙著	[涵訳73]同左。日本大沢天仙著
371	-9	駭殺奇談	[涵訳74]同左。駭殺奇譚
371	-8	大俠盜	[涵訳95]同左。大俠盜邯洛屏
371	-7	莫等斎主人訳	莫等閑斎主人訳
371	-5	双鋒	霜鋒闘
371	-5	歩青訳	[涵訳78]同左。吳歩青訳
371	-4	網中雨	網中魚
371	-3	花之魂	憲之魂
372	1	新小説林	[涵訳72]同左。新小説社
372	7	黃縹秋	黃繡球
372	-7	新婆子伝	新痴婆子伝
372	-7	笑居士	笑龜居士
372	-6	天繡樓詩史	[涵著101]同左。天繡樓侍史
379	7	最新聶格卡脱偵探案	[涵訳78]同左。最新聶克卡脱偵探案
382	1	先天客	[涵訳71]同左。洗天客

382	5	双絲	双胥絲
384	7	盜偵探血之花	血之花
384	-12	世界奇談	[涵訳83]詳細不明
384	-11	国民小説	(国民小説)刺国敵
384	-10	電術奇談	[涵訳83]詳細不明
384	-8	知心主人	知新主人
384	-7	警黄鐘伝奇与盜偵探血之花合集	警黄鐘伝奇与盜偵探血之花合冊
385	1	短篇小説	[涵著101]詳細不明
385	5錯海波.....醋海波.....
385	5	吳研人	[涵訳101]同左。吳趼人
393	-7	縁音絮語	綠陰絮語
393	-4	棠花怨(正)	棠怨花[涵訳80]の誤り
393	-4	吳訳	吳櫻訳
397	-12	賴子訳	[涵訳76]同左。支那賴子訳
397	-8	思綺斎生	思綺斎主
401	-9	女界鍾	女界鐘
402	-10	亜子訳	憂亜子訳
402	-9	英國歇洛克呵而唔斯	英國歇洛克呵爾唔斯
402	-8	湘鄉會広銓	湘鄉曾広銓

【注】

- 最初は「涵芳樓」といった。その呼び名が使われたのは短期間のこと。1910年には「涵芳樓」に定まったという。張人鳳、柳和城編著『張元濟年譜長編』上巻 上海交通大学出版社2011.1. 154頁注1、274頁注1、277頁注1
- 呂長君「商務印書館的涵芳樓」『出版史料』2004年第3期(新総第11期)2004.9.25。103頁。次の書籍が詳しい。柳和城『孫毓修評伝』(世紀出版集団、上海人民出版社2011.10)に「第四章涵芳樓“館長”和図書館学開拓者」(99-122頁)がある。
- 翻訳400種と創作120種は合計すると520種だ。その約3倍とは約1,500種になるはず。数字があわないのは、初版と改訂版とではここの数字に書き換えがあるからだ。初版は1,500種以上と書いているから約3倍でいい。改訂版ではそれを1,000種に訂正した。だが、約3倍はそのままにしたから整合性がなくなった。
- 関連する文章が何もなかったというわけではない。後になって次の文章をウェブ上で見つけた。王中忱「探訪《涵芳樓藏書目錄》」『中華讀書報』原載 新華網2003.08.14電子版。それによると『涵芳樓藏書目錄』の概要は以下のとおり。全4冊で初刊と続刊の2種類にわかれ。それぞれは「旧書分類総目」と「新書分類総目」である。刊年は書かれていません。収録された図書の出版年が1914年だから目録の編集は1914年だと推測で

きる、と。また、続刊の編集は1920年8月らしい。該文は、のちに「尋探涵芬樓」と改題され同氏『走讀記』（北京・中央編訳出版社2007.12）所収

- 5) 「続編」、つまり増補部分に刊年を「宣統辛亥年」とする書籍がある。1911年を表わしているから、該目録の刊年は1912年頃だろうと考えた。1912年10月2日に張元済は鄭孝胥に『涵芬樓書目』を贈呈した、と記録する。『張元済年譜長編』上巻368頁
- 6) 参考までに『商務印書館図書目録（1897-1949）』（北京・商務印書館1981）の分類大項目をあげる。総類、哲学、宗教、社会科学、語文学、自然科学、応用技術、藝術、文学、史地となっている。
- 7) 『涵芬樓和文書』（表示のまま）という目録があるそうだ。書名からして、その内容は『涵芬樓東文書分類總目』のことだと推測される。該書目および『涵芬樓舊書 続編』『涵芬樓新書』の3冊を一括して（『涵芬樓藏書目録』とある）中国のウェブ競売会に出品された。2007年のことだ。『涵芬樓和文書』について、各図書館には見ることができない、と出品書店主が注記している。落札されたかどうか、その後の消息は不明。
- 8) 189鏡今書局と190鏡鏡社の2社は、「鏡」の読み間違いで208鏡今書局と別々になっている。また、232樂群小説社（262頁）の1作品は、『地字号目録』のページ数を記載し忘れる。389時中書局342頁の翻訳3種は340頁と重複する。
- 9) 分類法の違いを知るために注6を参照されたい。
- 10) 実際には、光緒八年がある。380頁
- 11) 実際には宣統二年五月がある。329頁
- 12) ある版本の表紙は、別の紙で装丁してあるように見える。だが、書名はない。背文字があるかどうかは不明。

【関連論文】

- 汪 家熔「涵芬樓和東方図書館」『商務印書館館史資料』之七 北京・商務印書館総編室編印1981.3.20
- 汪 家熔「涵芬樓和東方図書館」『商務印書館一百年（1897-1997）』北京・商務印書館1998.5
- 蕭 新祺「商務印書館涵芬樓与地方志」『商務印書館館史資料』之二十七 北京・商務印書館総編室編印1984.6.20
- 樽本照雄「阿英「晚清小説目」の構造」『大阪経大論集』第48巻第4号（通巻240号）1997.11.15
- 陳 応年「涵芬樓的文化名人」『商務印書館一百年（1897-1997）』北京・商務印書館1998.5
- 沢本郁馬「『涵芬樓新書分類目録』に關連して」「商務印書館関係資料いくつか」所収『清末小説』第28号。のち『商務印書館研究論集』2006所収

（さわもと いくま）